

令和元年6月27日現在

機関番号：37117

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16702

研究課題名（和文）写本欄外註の網羅的調査に基づくシヴァ教再認識派研究

研究課題名（英文）A Study of the Pratyabhijna based on an examination of marginal notes in the manuscripts

研究代表者

川尻 洋平 (Kawajiri, Yohei)

筑紫女学園大学・文学部・講師

研究者番号：70712206

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：欄外註を含む写本資料については、入手可能なものはほとんど入手できた。それらの写本の欄外註を調査した結果、多くの『主宰神の再認識詳注』断片が確認された。『主宰神の再認識詳注』断片を含む欄外註の伝承に関しては、17、8世紀のカシュミールや14世紀以降の南インドには、十分な情報が伝承されていないことが明らかになった。再構築された『主宰神の再認識詳注』を検討する限り、アピナヴァグプタは、一見した所、独自の解釈をしているとしても、ウトパラデーヴァの体系化した神学を十二分に意識し、偈の解釈に反映させていることがあらためて確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、欄外註を最大限活用することによって、失われていた『主宰神の再認識詳注』の再構築を試みた。従来失われていたウトパラデーヴァの『主宰神の再認識詳注』が明らかになることによって、再認識派神学の発展だけでなく、インド本土とは異なる発展を遂げた仏教やパラモン教諸派のカシュミール思想史を解明することも可能になる。

またシヴァ教神学が、イスラム勢力が流入してきた後のカシュミールや南インドでどのように伝承されているのかを明らかにしようと試みている。これは思想史研究とは別に、生きた宗教文化の伝承の一端を解明することに資するものである。

研究成果の概要（英文）： With reference to the manuscript materials to be needed for this study, I obtained almost all of the accessible ones. By examining the marginal notes in the manuscripts, lots of fragments of Utpaladeva's Isvarapratyabhijnnavivrti are discovered. These marginal notes including the fragments of the Isvarapratyabhijnnavivrti are not transmitted in the 17th or 18th century in Kashmir nor after the 14th century in South India. Also, in the later period, they don't have the accurate information of the Pratyabhijna tradition.

As far as I examined the reconstructed Isvarapratyabhijnnavivrti, it is confirmed that Utpaladeva's idea are fully reflected in the interpretation given in Abhinavagupta's commentary even if the latter seems interpret the verse differently from Utpaladeva.

研究分野：シヴァ教

キーワード：ウトパラデーヴァ 『主宰神の再認識詳注』 アピナヴァグプタ 『主宰神の再認識反省的考察』  
バースカリー 『ヴァーチャー』 欄外註

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

カシュミール地方は古来様々な文化伝統の交錯点であった。有部や唯識の仏教の伝統が健在であり、文法学、ニヤーヤやヴィシュヌ教、シヴァ教の伝統などが栄えており、多くのインド学研究者の注目を集めてきた。しかし、イスラム文化が流入しイスラム王朝が成立した 1339 年以降のカシュミールは、ごく一部のインド学研究者を除き、等閑視されてきた。「偶像破壊者」の名で知られるスィカンダルの治世 (r. 1389-1413) において、ヒンドゥー教文化は弾圧され、多くのバラモンがカシュミールを離れたが、ザイヌル・アービディーンの治世 (r. 1420-1470) には、非ムスリムに対する融和策により、カシュミールを離れたバラモンが呼び戻されている。しかしイスラム王朝成立以降、カシュミール社会のイスラーム化が進んだ結果、シヴァ教神学の伝統と少なくないシヴァ教神学文献が失われた。このことは、アピナヴァグプタ (ca. 975-1025) の『主宰神の再認識反省的考察』(以下『反省的考察』) に対する註釈を著したバースカラカント (17 世紀頃) がしばしば再認識派の伝統や神学について誤った理解を示し、シヴァ教再認識派の学匠ウトパラデーヴァ (ca. 925-975) の『主宰神の再認識詳注』(以下『詳注』) の本文を引用しない点からも明らかである。『詳注』が失われていたこともあり、ウトパラデーヴァはアピナヴァグプタに比べてインド思想史において正当な評価を得られていなかった。

近年、Torella (ローマ大学) は『詳注』写本を発見し、また Ratié (パリ第三大学) はアピナヴァグプタの『反省的考察』写本の欄外註に『詳注』断片を見いだした。申請者は、すでに写本欄外註から『詳注』断片が回収されることを報告していたが、「失われた注釈文献『主宰神の再認識詳注』の再構築に基づくシヴァ教再認識派研究」(研究活動スタート支援)の一環として、『主宰神の再認識偈および注』(以下『再認識偈及び注』)のデーヴァナーガリー写本 (Mss No. 4404, Akhila Bharatiya Sanskrit Parishad, Lucknow) に含まれる『詳注』断片の欄外註を網羅的に蒐集した結果、当該写本には、Ratié が参照した『反省的考察』写本に全く見られない『詳注』断片が多数含まれることが明らかになっている。これらの『詳注』資料に基づいて、アピナヴァグプタがウトパラデーヴァの体系化した再認識派神学体系をどのような点で発展させ精緻化させたのかを明らかにできる環境が整えられつつある。

写本欄外註は、『詳注』断片だけではなく、為政者がヒンドゥー教徒からムスリムに変わる中で、シヴァ教文化がどのように伝承されていたのかを知る上でも貴重な情報源である。現在残されている多数の欄外註は熱心に研究されていたことを物語るが、いつ誰によって附されたのか、典拠はあるのかなど不明な点は多い。興味深いことに多くの『反省的考察』写本に残されている欄外註はしばしば共通している。このことは、ある特定の人物が写本欄外註を挿入し、それ以降は、写本欄外註をも含めて写本が複製されていた状況を示している。しかし、これらの欄外註の情報が、後代の注釈文献にどの程度反映されているのかについては明らかではない。欄外註の網羅的な調査を通じて 17 世紀頃までのシヴァ教神学の伝承実態の一端が明らかになる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は以下の二点である。第一に、シヴァ教再認識派写本の欄外註を網羅的に調査することに基づいて、アピナヴァグプタ以降のイスラム王朝下のカシュミールにおけるシヴァ教神学の伝承実態を解明すること、そして第二に、欄外註の網羅的調査から再構築される『主宰神の再認識詳注』に基づいて、ウトパラデーヴァが体系化した再認識派神学体系をアピナヴァグプタがどのような点で発展・精緻化させたのかを明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 欄外註の網羅的調査

シヴァ教再認識派写本を可能な限り入手し、そこに残された欄外註を網羅的に蒐集し、欄外註のデータベースを作成する。入手済みの『反省的考察』写本に残された大部分の欄外註は、複数の写本に共通して見られるが、他の写本に見られない独自の欄外註もある。これらの写本毎の欄外註の異同を対照することによって、欄外註の形成過程を分析する。『再認識偈及び注』写本に関しては、再認識派文献に同定されない欄外註を抽出し、『詳注』断片が否か吟味する。以上によって、『詳注』がいつ失われたのか、欄外註がスィカンダル治世以前にすでに著されていたのか否か、そしてどのような文献的背景のもとで再認識派文献が伝承されてきたのかを明らかにする。

#### (2) 欄外註と複注文献の比較対照

『反省的考察』には、17、8 世紀頃カシュミールのバースカラカントによって著された注釈『バースカリー』と 14 世紀以降に南インドで著された作者不詳の注釈『ヴヤーキヤー』という二つの複注文献がある。この二つの注釈に、網羅的に蒐集される欄外註が反映されているかどうかを検証することによって、それぞれの地域と時代に欄外註が伝承されていたのかを明らかにする。

これら二つの注釈と欄外註の比較については、『ヴヤーキヤー』のテキストが校訂されていないため、作業効率を考慮して、すでに申請者が『ヴヤーキヤー』の校訂を進めてきた認識章第一日課から第四日課までに範囲を限定して行う。

#### (3) 『主宰神の再認識詳注』の再構築

『再認識偈および注』のラクノウ写本から回収される『詳注』断片については、校訂テキストと翻訳研究を完成させる。また欄外註の網羅的調査によって新たに回収される『詳注』断片についても校訂テキストと翻訳研究を作成する。これによって、『詳注』全体を可能な限り再構築する。

#### (4) 『主宰神の再認識詳注に関する反省的考察』の文献学的研究

断片的な情報から、『詳注』で敷衍されたウトパラデーヴァの思想の全体像を把握することは困難である。よって、一定の範囲で彼の思想を把握するために、日課全体が現存する『詳注』認識章第四日課および比較的『詳注』がまとまった形で回収できる認識章第七日課第一偈を、アピナヴァグプタの『主宰神の再認識詳注に関する反省的考察』(以下『詳注に関する反省的考察』)とともに読解する。『詳注に関する反省的考察』については、刊本に使用されていない二つの写本を用いて再校訂テキストと翻訳研究を作成する。

認識章第四日課では、仏教認識論・論理学において議論されている「独自相」「自己認識」「他心知」などがアートマンを認める再認識派の枠組みにしたがって再解釈される。したがって、前提として仏教認識論・論理学の議論を抑える必要があることはいうまでもない。

#### (5) ウトパラデーヴァとアピナヴァグプタの思想的独自性の解明

(3) および(4)の文献学的研究に基づいて、アピナヴァグプタがどのようにウトパラデーヴァの議論を発展させ補充しているのか、両者の独自性を明らかにする。

### 4. 研究成果

写本欄外註を収集する前提として必要な再認識派写本に関して、研究開始時以降、ウツジャインの Scindia Oriental Research Institute 及びクルクシェートラ大学図書館に所蔵されているシャーラダー写本のデジタルデータを新たに入手した。また研究協力者の小倉智史博士の協力によって、カシュミール大学に所蔵されているシャーラダー写本のデジタルデータについても入手できた。これによって、欄外註を含む再認識派写本に関してはほぼすべて入手することができた。

写本欄外註の収集に関して、Chetan Pandey 氏によって写本資料が大量に提供されたことから、欄外註収集作業は、継続中である。Pandey 氏によって提供された資料の中に、『詳注』の認識章の最終偈である第八日課第 11 偈から行為章第三日課第 8 偈までの 25 偈をカバーする断片を含む写本が存在することが Ratié 博士によって報告され、その一部のテキストと翻訳研究が公表されつつある。したがって、『詳注』は、研究計画時に想定した以上の断片が伝承されていることが明らかになった。この断片に関しては、研究協力者の石村克氏の協力を得て、電子テキストを作成した。

欄外註の形成過程の全体像については未だ検討されるべき課題であるが、17 世紀に活躍したシャンカラカントが関与していることは明らかである。カシュミールの『反省的考察』のシャーラダー写本 (No.838, Oriental Research Library, Srinagar) にシャンカラカントが写本を書写したという記録が残っているからである。『詳注』は、シャンカラカントの時代には、断片的なものになっていたと考えられるが、どの時点で失われたのかについてはさらなる検討が必要である。

写本欄外註の蒐集に基づく『主宰神の再認識詳注』再構築に関する成果として、『再認識偈及び注』のデーヴァナーガリー写本 (Mss No. 4404, Akhila Bharatiya Sanskrit Parishad, Lucknow) に含まれる『詳注』の行為章以降のディプロマティックエディションの公表が挙げられる。『詳注』断片の試訳についてはほぼ終えているが、校訂テキストの作成に関して新たな断片が発見されていることもあり、継続している。

またチェンナイの Adyar Library に所蔵されているテルグ写本のデジタルデータを入手した。テルグ写本には、欄外註は確認されていないが、再認識派の南インドへの伝播を考える上で、重要な資料になると考えられる。

写本欄外註と複注文献である『バースカリー』や『ヴァーキヤー』を比較対照した限りでは、両複注文献に写本欄外註の影響を示す明確な証拠は見出せない。バースカラカントは、ウトパラデーヴァやアピナヴァグプタの著作順序に関する正確な情報を持っていないだけでなく、欄外註や『詳注』断片に関する情報も持っていない。南インドの『ヴァーキヤー』作者も、『反省的考察』において典拠を明示することなく引用される『主宰神の再認識詳注』断片をウトパラデーヴァの他の著作『精神的認識主体の確立』に帰している。他の再認識派文献や同派の伝統に関する詳細な情報が、後代のカシュミールや南インドに伝承されているとは言い難いことが明らかになった。

『主宰神の再認識詳注に関する反省的考察』の文献学的研究に関しては、認識章第七日課第一偈の読解を進めた。当該の偈に関しては、『主宰神の再認識詳注に関する反省的考察』を参照する限り、『詳注』のほとんどを回収できている。その結果、アピナヴァグプタが pratibhā という語を注釈する中で強調する「主体への現出」は、ウトパラデーヴァが体系化した「認識と対象は認識を離れては存在しえない」というシヴァ教一元論を反映したものであることが明らかになった。認識章第四日課の読解に関しては、全体の三分の二程度を終えている。今後、作業を継続し、アピナヴァグプタの議論の詳細を検討する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

川尻洋平、『主宰神の再認識詳注』の伝承について、印度学仏教学研究、66巻2号、36-41、2018、査読有

川尻洋平、シヴァ教再認識派における pratibhā について、印度学仏教学研究、65巻1号、276-271、2016、査読有

Yohei Kawajiri, New Fragments of the *Īśvarapratyabhijñāvivṛti* (3), *Samhāṣā* 33: 17-46, 2016, 査読有

### 〔学会発表〕(計7件)

Yohei Kawajiri, On the Transmission of the Pratyabhijñā to South India, *Seminari indologici* (Rome, Italy), 2019

Yohei Kawajiri, Introduction to the *Vyākhyā*, a South Indian Commentary on the *Īśvarapratyabhijñāvimarśinī*, *Seminaire Mondes indiens* (Paris, France), 2018

Yohei Kawajiri, On the Transmission of the Pratyabhijñā to South India, 17th World Sanskrit Conference (Vancouver, Canada), 2018

Yohei Kawajiri, Pratyabhijñā Philosophy: Kashmir and South India, International Workshop on pre-Modern Kashmir 2018 (Kyoto, Japan), 2018

Yohei Kawajiri, Buddhist Epistemology and the Pratyabhijñā School, International Seminar on the Philosophy of Abhinavagupta (Kolkata, India), 2017

川尻洋平、『主宰神の再認識詳注』の伝承について、日本印度学仏教学会(花園大学) 2017

川尻洋平、シヴァ教再認識派における pratibhā について、日本印度学仏教学会(東京大学) 2016

### 〔図書〕(計0件)

該当なし

### 〔産業財産権〕

#### 出願状況(計0件)

該当なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

#### 取得状況(計0件)

該当なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

### 〔その他〕

ホームページ等

該当なし

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

(2)研究協力者

研究協力者氏名：小倉智史

ローマ字氏名：( OGURA, Satoshi )

研究協力者氏名：石村克

ローマ字氏名：( ISHIMURA, Suguru )

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。